



「風流の」歌仙注釈（上）

著者	深沢 眞二
雑誌名	表現学部紀要
巻	19
ページ	115-128
発行年	2019-03-11
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00004670/

「風流の」歌仙注釈（上）

深沢眞二

要旨

元禄二年（一六八九）四月二十二日とその翌日に、奥州須賀川の等躬の屋敷で興行された、「風流のはじめや奥の田植哥」の芭蕉句を発句とする俳諧の歌仙一卷を注釈する。芭蕉・等躬・曾良の三吟である。底本には同年内に等躬が刊行した『俳諧葱摺』所載の本文を用いた。紙幅の都合により今回は初折の十八句の注を（上）として示す。

元禄二年（一六八九）四月二十二日、芭蕉と曾良は奥州須賀川の等躬の屋敷に到着し、翌日にかけて俳諧の歌仙一卷を興行した。曾良は満尾した歌仙を俳諧書留に記録した。また、等躬は同年内に『俳諧葱摺^{しのぶすり}』を江戸の書肆から刊行しており、そこには芭蕉の序を付した清書懷紙によって「風流の」歌仙全体が掲載された。

本稿では曾良の俳諧書留については『天理図書館善本叢書 芭蕉

紀行文集』（八木書店、一九七二）の影印を利用した。『俳諧葱摺』については『天理図書館綿屋文庫俳書集成 元禄俳書集 地方編』（八木書店、一九九九）の影印を利用した。さらに、同じ歌仙の表六句までを含む、芭蕉・曾良・等躬による「三子三筆」卷子が、倉島利仁氏・加藤定彦氏によって『連歌俳諧研究』第百十四号（二〇〇八・三）に紹介されているが、紹介者によれば、この卷子資料が『俳諧葱摺』の「編集の材料として参照されたのは確実。多少の異同が見られるのは、編者等躬あるいは版下筆者不角の所為によるものか」という。

「風流の」歌仙に注釈を試みるにあたり、本稿では『俳諧葱摺』の本文を最終的に芭蕉から等躬に贈られた歌仙本文に拠るものと見て採用する。三つのテキストの間に漢字表記と仮名表記、それにルビの有無の異同は多いが、いちいち言及しない。前書を除けば、句形の異同はわずか一箇所（19）である。まずは歌仙の初折を、濁

点は加えず、ルビはそのままに掲出する。

みちのくの名所く心におもひこめて
先関屋の跡なつかしきまゝにふる
みちにかゝりていまのしら河も越え
ぬ頓ていはせの郡にいたりて
乍単斎等躬子の芳扉を扣
彼陽関を出て故人に

逢なるへし

- 1 風流のはしめや奥の田植哥 芭蕉
- 2 覆盆を折て我まうけ草 等躬
- 3 水せきて昼寝の石やなをすらん 曾良
- 4 籬に鉢の聲いかすなり 芭蕉
- 5 一葉して月に益なき川柳 等躬
- 6 雇に屋根ふく村そ𦵏なる 曾良
- 7 賤の女か上総念佛に茶を汲て はせを
- 8 世をたのしやと涼む敷もの 等躬
- 9 有時は蟬にも夢の入ぬらん そら
- 10 樟の小えたに戀を隔てゝ 芭蕉
- 11 うらみては嫁か畠の名もにくし 等躬
- 12 霜降ル山や白髪おもかけ 曾良
- 13 酒盛は軍を送る関に来て はせを
- 14 𦵏をしる身と物讀し僧 等躬
- 15 更る夜の壁突破る鹿の角 そら

16 寫の御伽の泣伏る月 芭蕉

17 色くの祈を華にこもりゐて 等躬

18 悲しきほねをつなく糸ゆふ 曾良

「風流の」歌仙に対しては、曾良の俳諧書留が紹介されて以後のものに限つても、次の十種の注釈書がある。

【広】 広田二郎『芭蕉連句集』（新註国文学叢書、一九五一年）

【驚】 松井驚十『奥の細道研究と評釈』（一九四八―一九五二年に『獺祭』に掲載、遺稿集として一九六五年刊）

【喜】 阿部喜三男著・久富哲雄増補『評考奥の細道（増訂版）』（初刊は一九五九年、増訂版は一九七九年刊）

【宮】 宮本三郎『校本芭蕉全集第四卷』（一九六四年初刊、一九八九年再刊）

【高】 高藤武馬『奥の細道歌仙評釈』（一九六六年）

【加】 加藤文三『奥の細道歌仙の評釈』（一九七八年）

【中】 中村俊定・萩原恭男、岩波文庫『芭蕉連句集』（一九七五年）

【島】 島居清『芭蕉連句全注釈』第六冊（一九八一年）

【正】 阿部正美『芭蕉連句抄』第七冊（一九八一年）

【橋】 橋間石講述・大林信爾編『奥の細道歌仙』評釈（一九九六年）

本稿では【一】に示した略称によって先行注を示し、芭蕉の連句の付合を抄出して注釈した研究書も、必要に応じて利用する。また、本文を掲出するにあたっては適宜濁点やルビを加える（片仮名のものは原本のママ、平仮名のもは新たに加えたルビ）。注釈の手順とし

ては、【式目】・【付け】・【句意】の順でまとめてゆく。さらに【考】を付け加える場合がある。

みちのくの名所く心におもひこめて

先関屋の跡なつかしきまゝにふる

みちにかゝりていまのしら河も越え

ぬ頼ていはせの郡にいたりて

乍単斎等躬子の芳扉を扣

彼陽関を出て故人に

逢なるべし

1 風流のはじめや奥の田植哥

芭蕉

【式目】夏（田植哥）、国名（奥）。

【句意】前書は「陸奥の数々の名所を心の中に思い描いて、まずは白河の関屋の跡に惹かれる心にまかせ、関の跡を尋ねて古い街道をたどり、新しい街道の白河の関の跡も越えた。それからすぐに岩瀬の郡に至って、乍単斎等躬子のゆかしい住まいを訪ねた。王維の詩には『陽関を出れば故人無からん』という句があるが、私は陽関を出て故人に会えたと言えるだろう」と言っている。「関屋の跡なつかしき」とは、西行『山家集』所収の、

みちのくにへ修行してまかりけるに、白川のせきにとまりて、所がらにや、常よりも月おもしろく哀にて、能因が秋風ぞ吹と申けんおり、いつなりけんとおもひ出られて、名残おほく

おぼえければ、関屋のはしらに書付ける

白川の関屋を月のもる影は 人の心をとむるなりけり

の歌を慕つてのことだろう（引用は六家集本によった）。また、「陽関」云々は、『三体詩』の七絶実接に収められた王維「送元二使安西」（元二の安西に使用を送る）の詩である。村上哲見氏による朝日新聞社『中国古典選29三体詩1』（朝日新聞社、一九七八、日本における流布本である増註本の一つ泉南本を底本とする）によつて引く。

渭城朝雨浥輕塵

渭城の朝雨 輕塵を浥^{うる}おす

客舍青青柳色新

客舍 青青として 柳色 新たなり

勸君更盡一杯酒

君に勧む 更に尽せ 一杯の酒

西出陽關無故人

西のかた 陽関を出ずれば故人無からん

結句は「西へ向かつて陽関を出てしまえば、ともに杯をかわす友もいないだろうから」（村上氏の訳）ということ、芭蕉は白河の関を越えてから等躬という知己に会えたことを、王維詩をひねって表現したのである。乍単斎等躬子は、須賀川の俳人で本名は相楽伊左衛門、芭蕉より六歳年長で当時五十二歳。『おくのほそ道』では「等窮」と書かれている。

曾良書留における前書は、まず「奥州岩瀬郡之内須か川相楽伊左衛門ニテ」とあって、発句の句形は変わらず、作者名を「翁」としている。その後さらに「岩瀬の郡すか川の驛に至れば、乍単斎等躬子尋て、かの陽関を出て故人に逢なるべし」という前書の異文も

記録されている。これらを初期段階として加筆があり、『俳諧葱摺』の本文が成立したと見て矛盾はない。なお、「三子三筆」巻子の前書と発句は次の通り。

みちのくの名所／＼心におもひこめて

先関屋の跡なつかしきまゝに

ふるみちにかゝりていまの白川も

こへぬ頓ていはせの郡にいたりて

乍単斎等躬子の芳扉を

扣彼陽関を出て故人に逢なる

べし

風流の初やおくの田植うた

はせを

用字と行の配置に少しの違いがあるが、句文の内容は同一である。確かに、これを元に『俳諧葱摺』の版下の清書が行われたのである。

この発句については、別稿「おくの風流―芭蕉発句叢考―」（『雅俗』第十七号、二〇一八・七）に詳述した。曾良が「この日や田植の日也と、めなれぬことぶきなど有て、まうけせられける」（『この日』とは元禄二年四月「十三日」と書き留めたように、芭蕉たちは等躬が主宰する田植行事に合わせるように須賀川にやってきた。その、神事としての大がかりな「囃し田植」の行事を、「田植哥」に代表させて詠んだ発句と考えられる。私見によれば、陸奥の旅先で芭蕉が用いた「風流」は伝統的な習俗を尊重する心を意味し、また「初」は

そのような心が保たれてきた長い時間をやや大げさに表現した賞賛の語である。「陸奥の、古くゆかしき習俗を大切にすることの起源、『はじめ』とでも言うべきものに触れた思いがしました。こうして田植歌を聞かせていただきまして」と口語訳できる。白河の関を越えての感慨とするのは後年『おくのほそ道』をまとめる際に編集した結果であつて、実際の旅におけるこの発句の意図は、何よりもまず等躬への挨拶にあつた。

1 風流のはじめやおくの田植哥

芭蕉

2 覆盆子を折て我まうけ草

等躬

【式目】夏（覆盆子）、植物木（覆盆子）、人倫（我）。「覆盆子」は底本「覆盆」。曾良の俳諧書留によつて「子」字を補う。単純な書き落としと見られる。

【付け】「三子三筆」巻子では「いちごを折てわがまうけ草」となつており、「覆盆子」は「いちご」、「我」は「わが」と読むことは確かである。芭蕉が須賀川で触れた田植行事の風俗を褒めたのに対しての、等躬からの謙遜の気持ちをごめた挨拶返し。「まうけ草」は饗応Ⅱ「あるじまうけ」の意の「まうけ」に、材料・素材の意の「草」を添えた。赤羽学氏『芭蕉俳諧の精神拾遺』（清水弘文堂、一九九二）第十二章第十二節「奥の細道」にあらわれた東北の風俗」に、この脇句について、「覆盆子」が田植行事の飾りであつたらしいことを、『虚栗』所収の露草の発句「覆盆子折ル田歌のかざし五月蓑」を挙げて指摘している。田植と覆盆子は具体的な連想関係によつた付合

語なのである。

【句意】「覆盆子」は漢語としてはバラ科の木イチゴを言う。だが、芭蕉の当時にはイチゴ一般を指してもいた。この場合は、前述のように田植行事の飾りと考えられる点と、「摘みて」ではなく「折て」としている点から、木イチゴと見ておく。

「野の木イチゴを折り取つてきて、私からのおもてなしの材料としましょう。」

【考】従来、【鷺】【高】【正】が、黒羽での「秣負ふ」歌仙の脇句「青き覆盆子をこぼす椎の葉 翠桃」との関係を描いている。その関係は当然あるだろう。それも偶合ではなく、黒羽の桃雪から須賀川の等躬が発句が送られていたことを考えても、等躬が「秣負ふ」歌仙を目にしていたことは充分に有りうる。等躬は先行歌仙の素材を利用したのである。

2 覆盆子を折て我まうけ草 等躬

3 水せきて昼寝の石やなをすらん 曾良

【式目】雑、水辺用（水）。「昼寝」が夏の季語となるのは後のことである。

【付け】「覆盆子」の採れそうな山野の溪流を付けた。通説となっている【広】の説明「前句を隠遁者、悠遊自適している風狂の士と見て付けた」だけでは不足だろう。左に述べる典故からすれば奇人ともいふべき隠遁者を念頭に置いているのであり、等躬を俳諧の隠者として讀えた挨拶と見るべきであろう。

【句意】「石に枕し流に漱ぐ」の成句の利用である。それは『蒙求』

の「孫楚漱石」の記事を通じて知られていた故事による。晋の孫楚は若くして隠居しようとして、「当に石に枕し流に漱がんと欲す」と言うべき所を「石に漱ぎ流に枕す」と言い間違えた。誤りを指摘された孫楚はなおも「流に枕する所以は、其の耳を洗はんと欲す、石に漱ぐ所以は、其の齒を厲かんと欲す」と強弁した。この句は「石に枕し流に漱がん」とするまだまともな人物を描くが、曾良の狙いは、孫楚のごとき隠遁志向を持ち且つ強情でへその曲がつた人物を想起させることにあつたと思われる。「水の流れをせき止め、昼寝の枕にするために石の位置を直しているのでしょう」。後世、夏目金之助が漱石を号としたのも自らへそ曲がりを以て任じた故、というのはよく知られている通りである。

3 水せきて昼寝の石やなをすらん 曾良

4 籬に鮓の聲いかすなり 芭蕉

【式目】秋（鮓）、動物魚（鮓）、水辺用（鮓）。底本のルビ「ビク」の濁点はママ。

【付け】まず「水せきて」を受けて、それは魚籠を水につけておくためだったという発想で付いている。また、『便船集』の「石」の項に「鮓」や「鮓」の付合語があつて『類船集』にも、川の石のあたりに川魚がいるという連想が働いていよう。そのうえで、句の全体としては、前句に登場した隠者らしい人物の、風雅な行動として付いている。

【句意】カジカがどのような生き物かについて諸説有り。「石斑魚」

【広】、鰯に似た「いしぶし」(鰯)、あるいは「鰻」(宮)といった説明がされてきた。【加】は「鰻とは東北地方での語」としてハゼの類を想定している。なお、鰻の字は本来はイワナである。いっぽうで、カジカガエルは美しい声で鳴き、当時の季節としては秋であつた。【中】が「石斑魚、ゴリ、ハゼに似、秋夜清亮な声で鳴くと信ぜられていた。」と言うのは、魚のカジカがカジカガエルとの混同を起こし、鳴く物とされてきたということであろう。【中】はそのことを、千梅著で宝暦二年(一七五二)自序の俳諧作法書『箋纏輪』によって示している。『箋纏輪』中冊の「カジカ」項の後半を引く(振り仮名・清濁ママ)。「ゴリヨリ膩スクナク味カロシ、又山谷ニ有モノ大キサ三四寸班」文有テ形ハゴリ石ブシニ同シ、秋ニ至テ夜鳴ク、其声清亮也。依テ俗河鹿ト名ツク、炙食ス。佳品也。予昔旅行ニ下野ノ山家ニ宿リ夜中其聲ヲ聞ニ明朝炙リニ饗之ヲ。」

この句で芭蕉は、非現実なことを承知の上で、魚種をどれと決めがたいものの、魚のカジカを鳴く物として扱っているのではないかつまり一種の文学的ファンタジーと見られる。『枕草子』を典拠に芭蕉がかつて「蓑虫の音を聞に来よ艸の庵」(続虚栗)と詠んだのと同工である。「川に住む小魚のカジカを魚籠に入れて、その鳴く声を立てさせている」意。現実世界から逃れた空想的行為としてこそ、前句の俳諧的隠者の人物像にふさわしい。

【考】芭蕉には加賀の山中温泉での発句「いさり火にかじかや波の下むせび」がある(『卯辰集』所収)。これも魚の「かじか」を「むせび」物として取り上げている。

4 籬に鯉の聲いかすなり

芭蕉

5 一葉して月に益なき川柳

等躬

【式目】秋(月、一葉・川柳)、天象(月)、夜分(月)、植物木(川柳)。

【付け】前句に水辺の話題があつたことから「川柳」を出し、それからめて秋の月を詠もうとした。「川柳の幹に紐を結びつけて流れに漬けてあるビクを思い浮かべたか」(高)というのは考え過ぎだろう。「カジカの声を聞く」人物が、「一葉ちる」柳や「月」を愛でる風流人であるという意識でつながっている。「水に関係あることは三句続き芸がなさ過ぎる」(高)という評があるように、3水きて↓4ビク・カジカ↓5川柳は川の周辺の話題が並んでいて、いかにも転じが弱い。

【句意】「益なき」は、【高】が「やくだいもない」と言い換えて「月に対して何の風情もないというほどの意」と説明しているのが当たっている。「一葉ちる」とは、柳または桐について言う、初秋(立秋もしくは七月すぐ)の季節。いっぽう、「月」の賞美は八月十五夜が中心。この句は、そのような「一葉ちる」と「月」の季節的時間差を前提にして読むべきだろう。つまり、「秋が来て、川柳の一葉が散った。月の佳いころまでには柳はすっかり散って、月に風情を添える役に立たなくなっていることだろう」ということ。

5 一葉して月に益なき川柳

等躬

6 雇^{ユイ}に屋根ふく村ぞ^{あき}𦵏なる

曾良

【式目】 秋（𦵏）。

【付け】 前句を「初秋に一葉から散り始めた柳が、仲秋の月の頃にはすっかり散った」と受け止めて、田の稲の刈り入れ後の、秋の盛りの村の景を付けた。六句めらしい軽い遣句。

【句意】「雇^{ユイ}」は「結い」、すなわち村落の共同作業のこと。『国史大辞典』によれば「労働慣行の一型で、通例は個別農家間における互助的な労力の交換的貸借の慣行」である。「結いで家々の屋根を葺いているさまが見える。この村はなるほどいま秋のただなかだ。」

【考】 曾良はこの時須賀川で田植の「ユイ」を実見している。「秋になればやはり結いで屋根葺きなさる」という等躬へのメッセージがこめられているのかもしれない。

6 雇^{ユイ}に屋根ふく村ぞ𦵏なる

曾良

7 字 賤^字の女が上総念佛に茶を汲て

はせを

【式目】 雑^ズ、釈教（上総念佛）、人倫（賤の女）、国名（上総）。なお、「字」は、初折のウラに入ることの意味している。

【付け】「上総念佛」については、【駕】が「葛西念仏（葛西の土民が鉦・太鼓・笛を交え念仏を唱えつつ踊り歩くもの）」の類。葛西念仏は『嬉遊笑覧』の泡齋念仏の類（佐原あたりの鹿島踊りもこれに出ず、という）と解説しているが、葛西は下総であり、ずれる。そこで

【広】のように「上総法華に対する新造語」とする解釈も生じてきた。上総は日蓮ゆかりの地で法華が多く、また、法華と念仏はしばしば対立する宗旨としてとらえられる故の解釈だろう。だが、ここで「新造語」を用いたとしても何か効果があるようには見えない。

考証しきれない問題ながら、上総にも時宗寺院のあることであり、「上総念仏」と呼ばれる時宗信徒の踊り念仏が実際にあったのではないだろうか。いずれにせよこの句は、集団で踊りながら移動する念仏の習俗を前提にして、その集団に対する「撰待」（路傍で飲食を提供すること）を、農家の女たちが、「雇^{ユイ}」の飲食準備に合わせておこなっているという発想で付けていると見られる。7自体は雑の句と見るべきではあるが、「撰待」は基本的小盆の行事であるから、前句の「𦵏なる」の季感によく応じている。謡曲にも「撰待」の一曲があるが、この付けでは謡曲まではイメージされていないようだ。『類船集』に「茶↓屋根葺^{ふき}」の付合語があるので、前句の「屋根ふく」に「茶を汲て」は言葉による付けでもある。

【句意】「農民の女たちが、踊り念仏に來た「上総念佛」の衆に、「撰待」として茶を汲んで振る舞っている。」

7 賤の女が上総念佛に茶を汲て

はせを

8 世をたのしやと涼む敷もの

等躬

【式目】 夏（涼む）。

【付け】 これまでの諸説を分類すれば、

（1）上総念仏を踊り念仏から通常の念仏に読み替えている。

i、楽隠居が念仏を唱え、茶を汲んで賤の女が出した。

Ⅱ【驚】

ii、賤の女が念仏を唱えつつ、労働を終えて夕涼みしている。

Ⅱ【宮】

(2) 上総念仏は踊り念仏という理解のままで付けている。

i、それを聞きながら涼む人である。Ⅱ【島】【橋】

ii、上総念仏の踊っているがわについての句である。

Ⅱ【正】

となっていて、定説を得ていない。私見では、仏教信仰によって心が安楽な状態を「涼(し)」と表現することは常套なので、「世をたのしやと涼む」のは念仏に頼り切っている人々の感覚と見るのがふさわしい。したがって、(1) のiiの【宮】説か(2) のiiの【正】説ということになるが、打越しの6に村落の労働が描かれていたのでも、それと重複しない(2) のiiに賛成する。前句の「上総念佛」の衆への茶の撰待のために、路傍に「敷もの」も出されているのである。

【句意】「信心深い人々は この世で生きることば楽しいなあと、涼しく仏を信じ切った、何事も思い煩われない心で過ごし、涼しい場所の敷物に座っている。」

8 世をたのしやと涼む敷もの

等躬

9 有時は蟬にも夢の入ぬらん

そら

【式目】夏(蟬)、動物虫(蟬)、夜分(夢)。「夢」は「夢」の異体

字。

【付け】「涼む」に対して夏を続けて「蟬」を出した。「敷もの」を寝る床に敷くものを取り成して「夢」を付けている。句意のつながりとしては、「世をたのしやと涼む」を安楽の境地にいる人物のこととして、そのような人物の心には『莊子』の寓言の「胡蝶の夢」が根付いていようと想定し、それを「蟬にも」とアレンジした。

【句意】「蟬にも夢の入」とは、睡眠中の人間の魂が「蟬」の意識に入ること。たとえば【宮】の「涼をとりつつ快いうたたねの夢に、いつしか蟬の声も和して入ってしまった」という解釈は、主語を「蟬」としている点で誤っている。そのような解釈をするには【中】のように「夢にも蟬の」の倒置法的表現と見ねばならず、無理がある。そうではなく、この句の背景には「胡蝶の夢」の故事があると解する限りにおいて、「いつもは蝶に」入るところ、「有時は蟬にも」入るだろうと推量しているのである。故事をひねったおかしみがある。「莊周はくりかえし蝶になった夢を見たというが、」時によつては、蟬になった夢も見たりしたのではないかな。」

9 有時は蟬にも夢の入ぬらん

そら

10 樟の小えだに戀を隔て、

芭蕉

【式目】雜、恋(戀)、植物木(樟)。

【付け】前句の「夢」が恋の呼び出しとして機能した。意識が「蟬」に入った場合に、どのような恋が経験できるのかを想像した付けである。宮脇真彦氏が『芭蕉の人情句』(角川書店、二〇〇八)

において「いくら鳴き立てても相手に恋が通じないことだ」と解くように、蟬は激しく鳴くものという前提から発想して、それを恋の訴えの激しさと見た付け。

【句意】【宮】は、『夫木和歌抄』卷二十二の「しのだのもり」に載る「和泉なる信太の森の樟の木の小枝に別れて物をこそ思へ」を指摘する。この歌は『歌枕名寄』和泉国の信太杜の項に「六帖 樟木」としても載る。出典は『古今和歌六帖』、ただし「樟の木のは「くずのはの」。この歌の影響を認めてもよいと思う。その場合、一句としては「樟の木の小枝がたぐさんに分かれているように、恋も離ればなれになっている」の意となろう。先行注には「樟の小枝に隔てられて」のような解釈が見られるが、右の歌でも樟の小枝の数の多さが問題なのであって、ここは恋する蟬どうしが同じ小枝に行き当たらない嘆きである。

10 樟クスの小えだに戀を隔て、

芭蕉

11 うらみては嫁が畠はたけの名もにくし 等躬

【式目】 雑、恋（うらみ・嫁）、人倫（嫁）。打越しに「にも」とあってここで「も」はよろしくない。

【付け】 前句を、恋に邪魔が入っている状況が比喩的に表現されているものと把握して、その邪魔とは姑であったとした心の付け。

【句意】「嫁が畠」については「嫁入りの時、持参金代りに嫁の持つて来た畑」（正）のように取る説と「単に地名とするのがよい」（島）のように取る説とに分かれる。しかし、ここでは昔話の

「嫁殺し田」「嫁の田」と呼ばれる話形を参照すべきではないか。『日本説話伝説大事典』（勸誠出版、二〇〇〇）の「嫁殺し田」項（原田信之氏執筆）の前半を引く。

嫁が田植えの重労働のために死んだという伝説。嫁の田ともよばれ、各地に分布している。長野県北安曇郡松川村にある嫁殺し田の由来は、昔、姑に一日で田植えをしろと命令された嫁が懸命に植えて残り少なくなった時、股の下から太陽をのぞいたところ目をまわしてしまい、そのまま死んでしまったと伝えられている。

さらにはここに嫁が落日を招き返す話が加わる場合もある。同様の「嫁が畠」の伝説があったことは充分に想像できる。この11は、息子を奪われて嫁を恨む姑が畠での重労働を嫁に課して死なせてしまったという伝説に触れた人物が、その姑を恨めしく憎く思つて「嫁が畠」という地名が残っていることもまた憎いというのであろう。諸注はこれまで「うらみて」「にくし」の主体を姑と取ってきたが、「嫁が畠」の昔話を聞いた第三者と取る。なお、【島】は元禄五年（二六九二）刊の『柞原集』の、

過し春東路をのぼりけるに、嫁が畠といへるあり。姑のつれなかりしとかや。

かげろふや今も思ひのよめが畑

四睡

の例を指摘している。この例の「姑のつれなかりし」も、姑が嫁に
つらい畑仕事を課したという昔話のある「嫁が畠」のこととして理
解できよう。四睡句は昔話の「よめ」が「今も」哀れに思われると
いう内容で、右に述べた11の発想と共通している。

11 うらみては嫁が畠の名もにくし 等躬

12 霜降ル山や白髪おもかげ 曾良

【式目】 冬（霜）、山類体（山）、降物（霜）、支体（白髪）。

【付け】 前句で恨まれ憎まれている姑の容貌として「白髪」を付
け、「畠」の縁語としての「山」を組み込んでまとめている。さらに、
姑によるいじめを「霜降ル」に響かせている。

【句意】 「霜の降った山を見れば、白髪の人が面影に立つ」。なお、
老女の白髪といえは『後撰和歌集』巻十七・雑三の「ひがきの姫」
の詠「年ふれば我が黒髪も白河のみづはくむまで老にける哉」が想
起される。これは謡曲「檜垣」の主題に用いられて周知の歌で、12
の直接の典拠ではないが、老女のイメージの背景としてあつたかと思
われる。

12 霜降ル山や白髪おもかげ 曾良

13 酒盛は軍を送る関に来て はせを

【式目】 雑。

【付け】 おおよそ【鷺】に指摘があるが、「白髪おもかげ」から白

い「卯の花」を想像して、卯の花の歌枕である「白河の関」を連想
し、その白河の関での故事である「庄司もどし」の伝説を句に詠み
込んだのである。『千載和歌集』巻三・夏・藤原季通の「（詞書略）見
ですぐる人しなければ卯花の咲けるかきねやしらかはのせき」によ
って白河の関と卯花は寄合語であつた（『竹馬集』に「白川→卯花」、
『便船集』に「白川関→卯花」、『類船集』に「白河の関→卯花」。そ
の寄合語を用いて、曾良は須賀川における俳諧書留に、

しら河

誰人とやらん、衣冠をたゞしてこの関をこえ玉フと云事、清輔
が袋草紙に見えたり。上古の風雅、誠にありがたく覚え侍て、
卯花をかざしに関のはれぎ哉 曾良

という発句を記しとどめている。この発句は須賀川での俳席でも披
露されていたであろう。また、曾良は日記に「旗ノ宿ハヅレニ庄司
モドシト云テ、畑ノ中桜木有。判官ヲ送りテ、是ヨリモドリシ酒盛
ノ跡也」とも記録している。『校本芭蕉全集第六卷』はこの箇所注に
「奥州白川往昔記」に拠るとして「関・旗宿為旧地。昔源義経公、
奥州勢召連、関東え御上リノ時、出羽ノ庄司佐藤、此関迄彼公を奉
送テ、次信兄弟ヲ供奉仕ラセ、別テ涙淋地也」読みやすく手を入れ
た。ただし原本を確認できていない」という記事を引いている。つま
り、芭蕉は曾良の句に付けるにあたり、曾良の句を利用しつつ、当
地の「庄司もどし」の故事に話題を振つたのである。

【句意】 「息子たち次信・忠信兄弟を供奉させた義経の軍勢を送り、

白河の関まで来て、佐藤庄司らが酒盛りをしている。」

13 酒盛は軍を送る関に来て はせを

14 𤇀あきをしる身と物もの讀し僧 等躬

【式目】 秋（𤇀）、釈教（僧）、人倫（身・僧）。

【付け】 「関」を白河の関に限定して読んでは三句がらみであり、したがって西行や能因の俳とは見ないほうがよい。「関」で「酒」を酌み交わすという話題であれば、王維の七絶「送元二使安西」（元二の安西へ使するを送る）詩を想起するのは常識と言つてよい。本歌仙の発句の前書に「いはせの郡にいたりて乍単齋等躬子の芳扉を扣彼陽関を出て故人に逢なるべし」とあつて、すでに1の注で王維詩について言及した。発句の示された時に、芭蕉と等躬の間にこの詩をめぐる対話があつたと想像される。13の芭蕉句は曾良との対話であると同時に等躬へのサインでもあつたのである。そこで等躬は14で、同じ『三体詩』の七絶実接所収、しかも同じく送別の詩である嚴維の「丹陽送韋參軍」（丹陽に韋參軍を送る）を、王維詩に並列させる意識で付けたのではないか。これも『中国古典選29三体詩一』によつて引く。

丹陽郭裏送行舟 丹陽 郭裏 行舟を送る

一別心知兩地秋 一別 心を知る 兩地の秋

日晚江南望江北 日晚れて江南より江北を望めば

寒鴉飛尽水悠悠 寒鴉 飛び尽きて 水悠悠たり

漢籍について「物を読む」とは素読することである。漢籍に通じた人物を「僧」としたのは自然であろう。送別の酒席に加わつた僧が詩を唱えたという場面に仕立てている。

【句意】 「秋をしる身」と、漢詩句を読み上げた僧」の意。典拠の「心を知る」とずれているのだが、音数のために「身」とせざるを得なかったと見ておく。

14 𤇀をしる身と物讀し僧 等躬

15 更ふくる夜の壁突破る鹿の角 そら

【式目】 秋（鹿）、動物獸（鹿）、夜分（夜）、時分（更る夜）。

【付け】 「秋をしる身」という語句を、気が荒くなった秋の鹿の身に読み替えた付け。秋を知る身といえ、なるほど、秋が来ると鹿にさがりが付いて荒々しいことをするよ、という理屈の連想。また、「ものよみし僧」を「更る夜」に自庵で漢籍を素読していた人物とした。著名歌「奥山に紅葉ふみわけ鳴鹿のこゑきく時ぞ秋はかなしき」（『古今和歌集』巻四・秋上・よみ人しらず、『百人一首』猿丸大夫）のパロディとしての俳諧だろう。

【句意】 「夜更けに、庵の壁を突き破つて、鹿の角が入って来た。」

15 更る夜の壁突破る鹿の角 そら

16 寫しまの御伽おとぎの泣伏なきふせる月 芭蕉

【式目】秋（月）、月の句、恋（御伽…泣伏る）、山類体（寫）、天象（月）、夜分（月）。恋句がすでに四句離れて差し合ひでなくなつたので、前句の発情期の秋の鹿を呼び出しとして恋に展開させようとしたのだろう。

【付け】秋の三句めで芭蕉が月の句を任されたと見られる。『随葉集』に「鹿の鳴↓月のさやか」、「拾花集」と『俳諧類松集』に「鹿↓澄月」とあり、秋の鹿に対して月を付けるのは常套である。鹿が人の住まいの壁を破るという前句の場所を「寫」と見た付け。

【句意】「御伽」について、そして「泣伏る」理由について、諸注は割れている。【驚】は「流人の寵愛を受けた島の娘（お伽は高貴な人の寝間に侍る女）が赦免を受けて都へ帰ることになった主人との別れに堪へかねて、月下に泣き伏す意」と言い、【宮】は「流謫の君に仕える侍女か従者か、主従が月の下、都を恋うて泣き伏せるさま」と言う。また、柳田国男は『木綿以前の事』所収の「山伏と島流し」という文章に15、17を掲げて、

鹿の角に破られるような小屋の中でも、なお多くの流人は島の御伽を見つけて共に住んでいた。八丈ではその女を水汲みと呼ぶ習わしであった。それが男の懐旧談を聴いてもらい泣きをしたという、しおらしい情愛を詠じたものと思われる。

と解釈してみせている（引用はちくま文庫の『柳田国男全集17』によった）。【正】がこの柳田説に触れている。まず、「寫の御伽」という表現からすれば、「御伽」に選ばれた島の娘と取るのが自然だろう。そ

の点は【驚】や柳田説に賛成する。では、なぜ月に泣き伏せるのかといえば、前句に詠まれた秋の鹿は発情期の「妻呼ぶ鹿」として、猿丸大夫の歌のように人間を「かなし」ませ、恋情を掻き立てるのが本意であるから、貴人が都に帰りあとに一人残された「御伽」の女が貴人恋しさに「泣伏る」のではないか。一句としては「配流されてきた都の貴人に御伽として仕えていた島の娘が、月の下で泣き伏している」の意。月を主要なモチーフとする謡曲「松風」の、都に帰って死んだ行平中納言を慕って「起臥わかで枕より、跡より恋の責来れば、せむ方涙に、伏沈む事ぞ悲しき」と謡うシテ松風の面影をかすめていると思われる。ただし「寫」であるから、ずばり「松風」を踏まえたというのではない。

【考】拙著『旅する俳諧師 芭蕉叢考二』（清文堂、二〇一五年）所収「旅する俳諧師」の第三章において、出羽での芭蕉が、特定の故事や物語を傍として利用するのではなく、あるテーマに沿ったドラマの断片を創作する、「物語の体」を志向していたことを述べた。この16もそのような例に数えてよいと思われる。

16 寫の御伽の泣伏る月

芭蕉

17 色くの祈を華にこもりゐて

等躬

【式目】春（華）、花の句、植物木（華）。この句を恋と取るのは難しく、恋の句数は二句以上であるはずのところ、結果的に恋を16の一句で捨てている。芭蕉の誘いに等躬が乗らなかったと言うべきか。

【付け】月の句に直接花の句を付けなければならない、秋から春へ季移りの運びである。「月」と「華」は普通の連想語として付いており、前句の月を春の月に取り成したと見ることもできよう。「御伽」の女に対して、高貴な流人の側の島での行動を付けた。流人が帰洛を祈るのは女にとっては別れを意味する。それで女は「泣伏る」、という理屈を含んでいる。

【句意】流人の行動として「こもりゐて」すなわち「寺社に参籠して」ということなら、【正】の「鬼界ヶ島の流人達、成経・康頼らを俤にした趣向」との指摘の通りであろう。『平家物語』巻二「康頼祝言」によれば、鬼界ヶ島に流された丹波少将成経と康頼入道は「此島のうちに熊野三所権現を勧請し奉て、帰洛の事を祈申さばや」と願い、熊野に似た地形を探してそこを「那智のお山」と呼び、「日ごとに熊野まうでのまねをして、帰洛の事をぞ祈りける」。その祈りとは「ねがはくは憐みをたれさせおはしまして、古郷へかへし入させ給ひて、妻子をも今一度見せ給へ」というもので、これが「色くくの祈」の内容ということになる。句意の解は「花の盛りの間を、外にも出ずに籠居して、色々の祈を神仏に捧げて過す」（【正】）に従う。

17 色くくの祈を華にこもりゐて 等躬

18 悲しきほねをつなぐ糸ゆふ 曾良

【式目】春（糸ゆふ）、支体（ほね）。

【付け】「華」からまず西行を連想し、「祈を……こもり」から高野山

に籠もった西行に関する話題を付けた。『撰集抄』「高野参事 付骨にて人を造る事」の、西行らしき僧の説話である。高野の奥にあつて、友の聖が上京したため、語り合える友を欲しくなった僧は、

おもはざる外に。鬼の人の骨を取集て。人に作なす様。可レ信人のおろく語侍しかば。其まゝにして。廣野に出て。骨をあみ連ねて。造て侍れば。人の姿には似侍しかども。色もあしくすべて心もなく侍き。聲は有ども。絃管聲のごとし。げにも人は心がありてこそは。聲はとにもかくにもつかはるれ。たゞ聲の出べき。はかりことばかりをしたれば。ふきそんじたる笛のごとし。大かたは是程に侍るもふしぎなり。さても是をは何とかすべき。破らんとすれば殺業にやならん。心のなければ只草木と同じかるべし。おもへば人の姿也。しかじやぶれざらんにはとおもひて。高野の奥に。人もかよはぬ所にをきぬ。もしをのづから。人のみるよし侍らば。ばけものなりとやおぢおそれん。

（引用は架蔵の慶安三年（一六五〇）版『撰集抄』によった。同版本では卷四第十六話。なお、「殺業」はルビママ。）

と、「骨をあみ連らねて」人間を造ろうとして失敗し、高野の奥にそのまま放置した。僧はその後都で「伏見前中納言。師仲卿」から正しい方法を聞か、^{よし}「由なしと思歸して。其後は造らぬなり。」という。『撰集抄』にはさらに「土御門の右大臣」が人を造った時の話が添えられている。曾良は「色くくの祈」を西行の呪文と取って転じ

たのである。また、春の二句めとするために、「つなぐ」の縁語でもある「糸ゆふ」を詠み込んでいる。

【句意】「糸ゆふ」は糸遊、春の陽炎である。「西行が『骨をあみ連らねて造』り、出来損ないとして捨てられたという人間の、悲しい哀れな骨をその後につないでいるのは、糸遊の糸だ」の意。

(19～36は続稿)